

家庭環境の学業成績への影響

——男女差は存在するか？

齋藤 嘉孝

(国際医療福祉大学国際医療福祉総合研究所常勤研究員)

1. はじめに

どうしたら高い成績の子どもが育つのかといった疑問は、昨今から学歴を重視する日本社会にあっては、社会的な関心事の1つである。あるいは、子どもたちの間に存在する学力差は、社会問題として多くの国で認識されており、日本でも学力差の存在を扱う研究は少なくない(荻谷 1997など)。

子どもの学業成績について、社会学や教育学をはじめとして社会科学ではさまざまに論じられてきた。なかでも中心的に取り上げられたのは、家庭の影響であった¹⁾。1つには、親の社会経済的状態がある。親の収入・学歴・職業のレベルが子の学業成績に大きな影響をもつという知見である。つまり、高収入・高学歴・ホワイトカラーといった親のもとでは、学業成績の高い子どもが育つ傾向にあるというのである(荒牧 2000)。

しかし、家庭の影響として注目されたのは、この社会経済的地位だけではない。むしろ親が高階層に属さなくとも、学業成績の高い子が育つ可能性もまた否定できない。そうしたケースを説明する際に特に注目されたのが、親の社会経済的地位ではない家庭の諸要素であった。ここではそれら諸要素を、広義に「家庭環境」という呼称でよびたい。ここでいう家庭環境は、おもに人的・物的な部分である。「しつけ」のように言動に限定したものでなければ、「家庭の所有物」のように物理的な(非人的な)ものに限定するのでもない。むしろ、親の経済的な要素を除いたうえで、子どもに影響をおよぼしうる広い範囲での家庭の要素

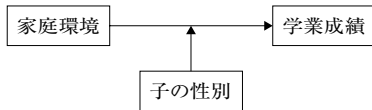
の集合体といえよう。

一口に家庭環境といっても多くの要素を含んでいるが、ポイントとなる要素として、次の3点が先行研究で注目されてきた。1つは、文化的刺激である(Parcel and Menaghan 1994など)。これは、親の所有する書籍や購読する新聞・雑誌といった家庭内の知的資産もあれば、また親と子がどう時間を過ごすかといった行動までふくまれる。たとえば、書籍の数が多かったり、娯楽施設ではなく博物館や図書館に連れていく機会が多かったりすれば、文化的刺激は高く、それらが高いことが子どもの学業成績に正の影響をおよぼすという。

2つ目は、学校活動への支援である(Ogbu and Simons 1998など)。これは親による(子どもの通う)学校との関わりといってもよい。親が学校をどれほど重要と感じているかといった心理的な関わりや、学校での行動や達成状況を気かけたり、宿題をみてやったりするかどうかといった行動上での関わりもふくまれる。これらの関わりが大きければ大きいほど、子どもの学業成績も高まる傾向にあるという。

3つ目は、あたたかい雰囲気(warmth)とでもいうものである(Voydanoff & Donnelly 1998など)。この要素では、子どもが安定した精神状態で家庭にいられるかが問題となり、居心地のよさともいえる。具体的には、しかるときに親が体罰をおこなうか、あるいは親が子どものことをどれほど理解しているかなどがふくまれる。体罰が多かったり、理解が少なかったりすることは、子どもが安心して家庭にいる状況をつくらなくなり、

図表-1 家庭環境のおよぼす学業成績への影響における子の性差



図表-2 記述統計値

	平均	標準偏差	範囲
子・性別 (女 = 1)	.49	.500	0-1
学業成績	2.82	1.087	1-5
文化的刺激			
I T	.61	.487	0-1
書籍	2.28	1.347	1-5
学校との関わり			
先生のいうこと	2.01	.819	1-3
親のテストへの関心	2.18	.819	1-3
居心地			
いろいろ	2.00	.954	1-4
理解されない	2.27	.989	1-4
子・年齢 (中学 = 1)	.53	.499	1-0

N=6,892。

学業成績に負の影響をおよぼしてしまうという。

これらの家庭環境の要素が子どもの学業成績に影響をあたえる傾向にあるというのは、過去にも検証されてきた。しかし、それが性差にもとづいた違いの存在に注目する例はほとんどなかった。

家庭環境の影響は、男子と女子で同じように受けるのだろうか。それとも女子は影響を受けやすいが、男子は受けにくいといった違いがあるのだろうか。そういった諸疑問に答えるのが本稿の目的である。つまり、本稿では、家庭環境の学業成績に及ぼす影響の男女差を、データを用いて検証しようとする。

関連したこれまでの研究知見から想像できるのは、女子の方が男子よりも家庭環境の影響を強く受けるかもしれないことである。関連研究では、まず親とのコミュニケーションにおいて女子の方が頻度が多く、話題の種類も多いことや(土谷 1996: 23-24)、女子の方が家庭のなかでの自分自身の役割をはたそうとする傾向にあることが報告されている(加藤 2001: 76-77)。また、行動面において女子の方が厳しく育てられる傾向があるのではないかとの指摘もある(片岡 1987: 36-39)。海外の例でも、女子の方が男子よりも家庭の影響を

受けると報告されている(Lloyd, Mensch, and Clark 1998)。

これらから想像すると、女子は親との社会的距離が比較的近く、男子は遠めな傾向があるといえないだろうか。だとすれば、親からの影響の程度も女子の方が大きいことが想像されないだろうか。

しかし、こういった関連した知見からの想像はあくまで論考にすぎない。そうではなく、実際にデータを分析して確かめる必要がある。以下はその検証であり、本稿の意義はそこにある。本稿で検証するモデルを図示すると、図表-1 のようになる。

なお、分析において、すべての年齢に男子と女子の差が見出されるかは確実ではない。たとえば、小学生ではある家庭環境の要素が意味をもつが、中学生ではその要素は関係ないといったこともあるかもしれない。そこで、子どもの年齢も考慮に入れることで、より特定の状況での分析をおこなってゆく。

2. データ・変数

本稿で用いるデータは「小・中学生の生活と意識についての調査」(藤田英典代表)である²⁾。標本は、地域や特色などに偏りがないように全国9都県の教育委員会や校長や大学の教育学部教員に依頼し、小学校30校と中学校18校が抽出された。各学校で小学5年生と中学2年生の全員が対象となり、教室での集合法で自記式回答がなされた。小学生3,380人、中学生3,764人が回答した。データ収集は1995年3月になされた³⁾。

おもな質問項目は、家庭生活、学校生活、友人関係、メディア利用、消費行動、自己意識などである。親との関わりの項目もあり、本稿でもそれを中心的に用いる。

なお、こういった立論での実証研究のばあい、親から収集したデータを用いることも少なくないが、今回使用するデータは子どもによる回答であり、それ自体は問題ではないとしたい。というのは、今回分析で使用する項目は、収入や資産といった親でなければ正確に回答できない項目ではない。また、小学生も子どもとはいえ5年生であ

図表-3 記述統計値 (性別、小中学校別)

	小学男子		小学女子		中学男子		中学女子	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
学業成績	3.06	1.087	2.84	.950	2.78	1.189	2.64	1.048
文化的刺激								
I T	.58	.494	.60	.490	.63	.484	.64	.480
書籍	2.39	1.400	2.37	1.324	2.22	1.358	2.18	1.294
学校との関わり								
先生のいうこと	2.22	.786	2.12	.794	1.94	.819	1.81	.812
親のテストへの関心	2.00	.825	1.97	.819	2.37	.768	2.32	.787
居心地								
いらいら	1.91	.934	1.96	.930	2.01	.974	2.10	.964
理解されない	2.12	.981	2.23	1.011	2.27	.970	2.43	.971

小学男子N=1,620、小学女子N=1,595、中学男子N=1,881、中学女子N=1,796。

図表-4 相関係数行列

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.	8.
1.性別								
2.学業成績	<u>-.080</u>							
3. I T	<u>.103</u>	.017						
4.書籍	<u>.120</u>	-.010	<u>.156</u>					
5.先生のいうこと	<u>-.062</u>	<u>-.067</u>	<u>-.031</u>	.012				
6.親のテストへの関心	<u>.101</u>	<u>-.029</u>	<u>.054</u>	.016	<u>.169</u>			
7.いらいら	<u>-.085</u>	<u>.038</u>	.002	-.005	<u>.053</u>	<u>.051</u>		
8.理解されない	<u>-.061</u>	<u>.069</u>	<u>.031</u>	<u>.020</u>	<u>.035</u>	<u>.059</u>	<u>.463</u>	
9.小中学校	<u>-.110</u>	-.008	<u>.047</u>	<u>-.067</u>	<u>-.180</u>	<u>.221</u>	<u>.063</u>	<u>.089</u>

下線の数値は $p<.05$ 。N=6,892。

り、問題の意味が理解できないといった問題はなかったと思われ、低学年とは異なる。また、家庭環境について、子どもからみたフィルターを通しての批判もあるかもしれないが、そうした子どもの主観こそが重要だともいえる。

さて、本稿で使用する変数の記述統計値は、図表-2のとおりである。なお、それを性別、小中学校別に示したのが、図表-3である。独立変数は「家庭環境」であり、上述した3つの要素を扱う。すなわち、「文化的刺激」、「学校との関わり」、「居心地」である。3要素につき、それぞれ2つの変数を用意する。

まず、文化的刺激は「IT」(家にパソコン・ワープロがあるかどうか: ある=1、ない=0)と、「(家にある)書籍(の量)」(本棚0~3段分くらい=1、本棚1本分=2、2本分=3、3本分=4、4本以上=5)で測定する。

次に、学校との関わりは「先生のいうこと(をよく聞くように言われる)」(ほとんどない=1、

ときどきある=2、よくある=3)と、「テストの点(を親が聞く)」(ほとんどない=1、ときどきある=2、よくある=3)で測定する(以下「親のテストへの関心」)。

最後に、居心地のよさは「(家にいると)いらいら(する)」(ない=1、あまりない=2、ときどきある=3、よくある=4)と、「理解されない(家族は自分をわかってくれない)」(ない=1、あまりない=2、ときどきある=3、よくある=4)で測定する。

従属変数は「学業成績」である。クラスのなかでの自分の位置をたずねており、子ども自身

に5段階で選んでもらった(下の方=1、やや下の方=2、中くらい=3、やや上の方=4、上の方=5)⁴⁾。

以上の変数を中心に扱うのだが、子どもの年齢についても考慮する。小学生と中学生で同じメカニズムがはたしているのかを検証するのである。

なお、本稿ではデータの制約のため、親の階層を測る変数を直接的には扱っていない。しかし、「文化的刺激」という要素を分析に入れており、これが親の階層と強い関係があるのはこれまでも指摘されてきたとおりである(Parcel and Menaghan 1994など)。よってこの代理変数をもってして、階層についての考慮にもなると考える。

分析手法は、家庭環境の各変数が学業成績と関係しているのかどうかを確かめるために、学業成績を従属変数とし、家庭環境の各変数を説明変数とした回帰分析を用いる。その際に男子と女子で別個の回帰式とする。さらに小学生と中学生も男女それぞれで別個の回帰式とする。なお、変数間

図表-5 学業成績についての回帰分析 (小学生)

変数	男子		女子	
	(a)	(b)	(a)	(b)
文化的刺激				
I T	.208 (.055)***	.095	.192 (.048)***	.099
書籍	.070 (.019)***	.091	.082 (.018)***	.114
学校との関わり				
先生のいうこと	-.092 (.035)**	-.066	-.142 (.030)***	-.119
親のテストへの関心	.161 (.033)***	.122	.099 (.029)***	.086
居心地				
いらいら	-.065 (.031)*	-.056	-.012 (.028)	-.012
理解されない	-.011 (.029)	-.010	-.059 (.026)*	-.063
定数	2.801 (.120)***		2.791 (.107)***	
R ² 乗	.040		.051	
F値	11.230***		14.322***	

男子はN=1,620、女子はN=1,595。(a)は標準化されていない係数で、カッコ内は標準誤差。(b)は標準化された係数。*p<.05、**p<.01、***p<.001。

図表-6 学業成績についての回帰分析 (中学生)

変数	男子		女子	
	(a)	(b)	(a)	(b)
文化的刺激				
I T	.288 (.055)***	.117	.065 (.051)	.030
書籍	.058 (.020)**	.066	.101 (.019)***	.124
学校との関わり				
先生のいうこと	-.205 (.033)***	-.142	-.160 (.030)***	-.124
親のテストへの関心	.299 (.035)***	.193	.171 (.021)***	.182
居心地				
いらいら	-.154 (.031)***	-.126	-.042 (.029)	-.039
理解されない	.003 (.031)	.003	-.035 (.029)	-.032
定数	2.456 (.122)***		2.283 (.115)***	
R ² 乗	.085		.063	
F値	29.059***		19.880***	

男子はN=1,881、女子はN=1,796。(a)は標準化されていない係数で、カッコ内は標準誤差。(b)は標準化された係数。*p<.05、**p<.01、***p<.001。

つ目の「文化的刺激」は予想に違わず、「IT」も「書籍」も正の影響をおよぼしている。また、これらの項目が階層の指標に近いと解釈するならば、階層と子どもの学業成績との関係は、やはり先例にならって支持されたことになる。そして、以下の解釈は、こうした階層の影響を統制しているものと理解して進めてゆきたい。

「学校との関わり」であるが、「親のテストへの関心」に関しては正の効果を示している。つまり、テストの点を親が気にかけてあげればかけるほど、子どもの成績は高い傾向にある。しかし、もう一方の「先生のいうこと」を聞くようにいうことは、負の効果を示している。これは男女ともに同じ傾向にある。つまり、先生のいうことを聞くようにいわれすぎること

の相関係数行列は図表-4の通りである。

3. 分析結果

ここでは順に回帰分析の結果をみてゆきたい。まずは図表-5であるが、これは学業成績が家庭環境の各項目といかなる関係にあるかをみた回帰分析の結果である。ここでの対象は小学生であり、男女別々に示してある(中学生は図表-6)。

総じていえるのは、さほど大きな男女差はみられないことである。3つの要素が男女どちらにも有意に影響をあたえているのがわかる。まず、1

は、かえって子どもにはよくない結果となっているのである⁵⁾。

しかし、「居心地」に限ってだけは、男女で違った傾向がみられる。家で「いらいら」することは男子には負の影響をおよぼすが、女子にはそうではない。また、「理解されない」ことは、女子には負の影響をおよぼすが、男子にはそうならない。要するに、居心地は何かしらの形で男女どちらにも影響をおよぼしているといえるものの、細かい項目では必ずしも一致していない。これらの解釈は後述するが、小学生に関していえば「あたたかさ」という上位概念にもとづいた変数におい

て男女差は予想したほどみられないといえよう。女子と同様に男子も影響を受けている。

次に、中学生についての分析結果をみてみたい(図表-6)。全体的に、小学生よりも男女差が出現するようになる。まず「文化的刺激」であるが、大方は小学生の傾向と一致するものの、1つだけ差がでてくる。それは女子の「IT」についてである。中学生女子のばあい、家庭にワープロやパソコンといった情報機器があるかどうかは、学業成績の良し悪しに有意な影響をおよぼさない傾向にある(解釈は後述)。これは男子にはみられない。

しかし、「学校との関わり」については、男女とも小学生のとき同様、差はあまりない。すなわち、「先生のいうこと」を聞くようにするのは負の影響で、「親のテストへの関心」は正の影響である。ただ、前者の「先生のいうこと」は、男子の方で、小学生のときはベータ値が -0.066 だったのに、中学生になると -0.142 に上昇している。つまり、年齢が上になるほど、その負の影響が強まるのである。一方、女子は小学生が -0.119 で、中学生が -0.124 といったように、大きな変化はみられない。

「居心地」については、男子は小学生と同様に、「いらいら」の負の影響だけが有意である。もっといえば、小学生のときのベータ値は -0.056 であったが、中学生になると -0.126 となり、中学生の方が「いらいら」の影響は強くなる。しかし、女子は男子と違い、どちらも有意でなくなる。つまり、「理解されない」と感じることも学業成績には関係がなくなる傾向にあるのである。これらの解釈を次節でおこなってみたい⁶⁾。

4. 考察

分析結果から導かれる知見は、まず小学生では男女差が顕著にはみられないことである。細かな違いはさておき、文化的刺激・学校との関わり・居心地といった3つの要素がどれも影響をあたえていた。

しかし、中学生になると男女差は顕在化してくる。特に女子にはいくつかの変化が生じる。ま

ず、ITが家庭にあるかどうかは有意でなくなり、さらに居心地も有意ではなくなる。一方、男子は小学生のときと大きな変化はみられない。しいていえば、先生のいうことを聞くようにいわれることが小学生のときよりも強い負の影響となり、またいらいらすることも小学生のときよりも強い負の影響となることがある。

これらをもとにいくつかの論点が指摘されようが、第1に、予想と異なり男子も女子と同じほどに(中学生では女子以上に)家庭環境の影響を受けていた点について考察したい。これは、本稿の分析が学業成績に関連した面を扱っていた点から解釈できよう。学業に関しては、女子への親の強い影響は強調されすぎず、男子も影響を受けることが予想される。いくつかの報告では、学業面に関しては男子にも女子にも親は期待・投資をしていて、その点でのしつけに性差は大きくみられないことが指摘されている(高田 2000; 永井 2002: 29)。さらに、片岡(1987)は、女子は男子に比べて行動面などで(学業面ではなく)厳しく育てられる傾向があると報告している。これらを考慮すると、女子が親の影響をより強く受けているというも、生活・行動面の向きが大きく、学業面ではないという可能性が指摘できよう。

第2に、女子へのIT環境の影響に注目したい。女性が情報機器の使用に男性ほど積極的でない傾向はこれまでに指摘されている(木村 2004など)。小学生のころは男女ともにさほどワープロもパソコンも必要ないという意味で、家庭にあらうがなかろうが先述のように自らの使用とは関係ないのかもしれない。しかし、中学生ともなるとより積極的に関心を持つことが想像され、家庭にあることが、使用のしやすさ、ひいては情報量や情報処理能力などに影響してくるかもしれない。そう考えると、男子が女子よりも何らかの形でIT環境による正の影響を享受しやすいのは、不自然なことではなさそうである。

第3に、「理解されない」についてである。男子は親に理解されなくとも大きな影響はないが、女子は少なくとも小学生の時点では学業成績までも左右しかねないとの結果がでた。女性は人との

関係性を重んじる傾向にあり、人にどれだけ感情移入してもらえるかが重要というのは、賛否両論ありながらも一定の支持を得てきたが (Maccoby and Jacklin 1974)、ここでそれが関係しているかもしれない。ただし、これも中学生の女子には関係がなくなるようであり、幼いころの女子の方が情緒的な安定が学業成績に結びついていることは注目に値する。

第4に、男子は「先生のいうこと」「いらいら」といった項目で、女子と違って小学生よりも中学生の方が影響は強かったことである。これも、本稿が学業関連の面を扱ったことから説明できよう。今日の日本社会にあつては、高校や大学の入学試験の重みは、学年が上に行くにつれて高まってくる。しかし、親が干渉してくることは、年齢の大きくなった男子には「いらいら」になってしまう可能性がある。中西 (2003) は、母親との関係についての子どもの意識を論じており、男子は親から離れて一人前と考えるのに対し、女子はあらたな親子の仲を築くことで一人前と考えると論じている。

第5に、これは男女差についてではないが、「先生のいうこと」が正ではなく負の効果を示していたことについてである。もっとも、親がよかれと思つてすることが何でも正の結果になるわけではなからう。神原 (2000) は「子育て行為の逆機能」を唱えているが、まさにそういった視点からの解釈が必要である。

また、それに関連する本稿での予測は、米国の主に低階層や黒人などに関する知見をもとにしてきた。しかし、先生のいうことを聞くようにしつけることは、そもそもさほど生徒が荒れた状態にない日本の生徒にとって、わざわざ親がいうことではなく、どの生徒も基本的にはできていることのように思える。むしろそれをわざわざ口にされるのは、かえってうるさく聞こえてしまい、逆効果なのかもしれない。この点で社会差が指摘できよう。

これらを総合すると、細部では男女差は存在するものの、小学生のうちは大きな差異はみられないが、中学生になるとやや顕在化してくるといえる。

最後に今後の研究への展望をいくつか考察しておきたい。まず、家庭環境の子どもへの影響として、本稿は学業に関することを扱ってきたが、それ以外の影響も興味深いところである。社会性、非行、生活習慣などに影響をあたえる家庭環境も検討の余地がある。これらについて子の性差を検証したならば、また違ったパターンが抽出される可能性はある。さらに、可能ならば親の性差も子の性差に交えて考察する必要がある。つまり、父と男子、父と女子、あるいは母と男子、母と女子といった4つの組み合わせにおけるそれぞれの家庭環境の効果である。本稿はテーマの拡散を避けるため、またデータの制限のためにおこなわなかったが、これらの違いを検討することも必要であろう。また、親の回答を用いたデータも使うことも意義があるだろう。子どもの回答との乖離がもし存在するならば、それを分析対象とするのも重要となってくるかもしれない。

5. 結び

人的・物的家庭環境による学業成績への影響に、子どもの性差がどういった違いを生みだすかを本稿はみてきた。同じ家庭環境であっても、男子と女子では影響が違うのではないかと、とりわけ女子の方が影響を受けやすいのではないかという疑問を解くためであった。結果は、小学生のうちにはあまり男女差はみられない、つまり男子でも女子でも同じことをすれば同様の効果があらわれる部分が多い、しかし中学生になるとやや違った傾向があらわれるということであった。ここで注意すべきなのは、中学生でも細部をみれば男女差はみられるものの、あくまで今回の分析に限りいえたのであり、この結果で必要以上に男女差を意識することが本意ではない。

しかし、実践的な提言をあえて抽出することも可能である。つまり、男子と女子に違ったことをしてあげた方がよい具体的なことも、少なからず存在すると考えられる。まず、男子にはいらいらさせるような思いをさせないことが挙げられる。うるさくいいすぎない、独立を重んじるなどの心

がけが効果をあげるかもしれない。一方、女子（とりわけ小学生のころ）には「自分は理解されていない」と思われぬようにすることが挙げられよう。十分に話を聞いてあげる、寂しくさせないようにすることなどが効果をあげるかもしれない。ただ、これらも今後の実証研究とともに、より深く理解されるべきである。

男子と女子に同じことをしても差が生じてくるのかどうか、生じるならばそれはどういった点なのか、一般的に意識の高い事柄のように思えるが、まだ知られていないことが多い。今後さらなる研究の蓄積が進むことを期待したい。

注

- 1) もちろん遺伝的要素、あるいは近隣（地域の文化的資源）や学校（生徒・教師の質）なども研究対象となってきたが、本稿の対象とは直接関係がないのでここでは詳しくふれない。
- 2) これはSSJデータ・アーカイブに所蔵されており、二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJデータ・アーカイブから個票データの提供を受けた。当調査データの各項目を網羅する報告としては、藤田ほか（1996）に詳しい。
- 3) データ収集はやや最近ではない感もあるが、バブル経済の崩壊以降の収集であり、本稿の知見に大きく関わってくるような変化が日本社会に生じたとは考えにくい。十分に有効であるといえる。
- 4) 生データのコーディングは、上の方=1、やや上の方=2、中くらい=3、やや下の方=4、下の方=5であったが、本稿の分析にあたって便宜上、逆にコーディングした。
- 5) 逆の因果関係の可能性も指摘できる。つまり、成績の低い子どもほど、親から先生のいうことを聞くようにいわれるという傾向である。
- 6) なお男女をダミー変数として同様の分析をおこなったが、本稿の結果と矛盾するものではなかった。また「先生のいうこと」「親のテストへの関心」は3件法の変数であるため、ダミー変数にして同様の分析をおこなったが、これも本稿の結果と矛盾するものではなかった。

文献

- 荒牧草平, 2000, 「教育機会の格差は縮小したか」近藤博之編『日本の階層システム3: 戦後日本の教育社会』東京大学出版会, 15-35.
- 片岡栄美, 1987, 「しつけと社会階層の関連性に関する分析」『大阪大学人間科学部紀要』13: 25-49.
- 加藤邦子, 2001, 「育児支援が親子関係、子どもの発達に及ぼす影響」『家庭教育研究所紀要』23: 68-82.

- 荻谷剛彦, 1997, 「教育における不平等と〈差別〉——不平等問題のダブルスタンダードと『能力主義的差別』」解放教育研究所編『シリーズ解放教育の争点 第1巻・解放教育のアイデンティティ』明治図書出版, 128-145.
- 神原文子, 2000, 「『子育てと親子関係調査』の概要」神原文子・高田洋子編著『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房, 27-42.
- 木村忠正, 2004, 「リテラシーと信頼」橋元良明代表『インターネット利用に伴う情報格差, 対人関係希薄化の分析』平成13~15年度 科学研究費補助金（基盤研究(B)(1)）研究成果報告書, 352-382.
- 高田洋子, 2000, 「子どもの教育への期待と親子関係」神原文子・高田洋子編著『教育期の子育てと親子関係』ミネルヴァ書房, 169-191.
- 土谷みち子, 1996, 「思春期の親子関係・友達関係との関連」『家庭教育研究所紀要』18: 20-33.
- 永井暁子, 2002, 「教育費は減少したか——子供中心主義家計の行方」『季刊家計経済研究』55: 24-31.
- 中西泰子, 2003, 「母—娘関係と『母親業の再生産』」『家族研究年報』28: 27-37.
- 藤田英典・坂口里佳・伊藤茂樹, 1996, 「現代の子どもたち——生活と意識のプロフィール」青少年文化研究会・藤田英典代表『子どもたちの生活世界——「小・中学生の生活と意識についての調査」報告書』伊藤忠記念財団, 7-88.
- Lloyd, C. B., B. Mensch, and W. Clark, 1998, "The Effects of Primary School Quality on the Educational Participation and Attainment of Kenyan Girls and Boys," Paper presented at the 1998 meetings of the Population Association of America.
- Maccoby, E. E., and C. N. Jacklin, 1974, *The Psychology of Sex Differences*, Stanford: Stanford University Press.
- Ogbu, John U., and H. D. Simons, 1998, "Voluntary and Involuntary Minorities," *Anthropology and Education Quarterly*, 29 (2): 155-188.
- Parcel, T. L., and E. G. Menaghan, 1994, *Parents' Jobs and Children's Lives*, New York: Aldine de Gruyter.
- Voydanoff, P., and B. W. Donnelly, 1998, "Parents' Risk and Protective Factors as Predictors of Parental Well-Being and Behavior," *Journal of Marriage and the Family* 60: 344-355.

(2005年4月19日掲載決定)

さいとう・よしたか 国際医療福祉大学国際医療福祉総合研究所常勤研究員。主な論文に「個人ホームページ所有と電子コミュニティの社会文化的差異」(『情報通信学会誌』, 2005)。家族社会学、情報行動論、社会福祉・政策、社会統計学専攻。(saito_yoshitaka@hotmail.com)